

## 特別講演 I 第50回 日本赤十字社医学会総会

## 「大震災の時代に生きる」

熊本県立大学理事長 元東日本大震災復興構想会議議長

いおきべ まこと  
五百旗頭 真

日本赤十字社医学会の50周年にこのような機会を得たことを大変光栄に思う。

日本赤十字社が1877年の西南戦争時、博愛社と佐野常民らが戦線のどちら側であるかを問わず、傷ついた人たちを救護するという活動を始め、それ以来、約130年を経ようとしている。

また、今、クリミアは違った文脈で話題になっているが、国際的にはよく知られているように、1853年から始まったクリミア戦争でナイチンゲールらが活躍した。その活躍に刺激を受け、10年後の1863年にデュナンらのリーダーシップの下に国際赤十字ができた。以来150年を数える。

日赤としての活動は、130年という長い歴史を持つ豊かなものであるが、この医学会も演題数は961題という。私のような人文社会科学をやっている者からすると、気の遠くなるような大変大きな学会で、驚きである。

とりわけそういう先端的な研究の土台があって、赤十字の医療活動が国民を支える大きな意味を持っている。その中でも日赤熊本が特に力を入れている災害救援という活動については、本当に立派だと日頃から敬意を覚えている。

このたびの東日本大震災にあたって、大変活躍された。

阪神淡路大震災の経験によると、「大変です、人が死にそうだ」という状況下で、警察、消防、自衛隊は、まず生命を守ろう、救出しようという第一線部隊であるが、自治体は、地域の平時の対応を基本にしており、デスクワークなどを行っているため、東日本大震災

のような想定を遥かに超える大災害が起こると対応が困難になる。

ところが、阪神淡路大震災以後は、消防のように自治体を基本にしている機関でも、全国の広域緊急支援体制を制度化した。それがどの程度のものかということ、3月11日に発生した東日本大震災で、三陸海岸の南三陸町という町では、津波で町ごと根こそぎ、人も、町も、家も持っていかれ、大変なことになり、現地の消防、警察はお手上げ状態になっていたが、その2日後の早朝に、緊急広域支援部隊が南三陸町に入るという予告があった。現地の消防署長が町の入り口まで迎えに行くと、消防車両が50台、ごうごうと音を立てて入ってきた。「こんなに来てくれるのか、こんなに早く来てくれるのか」と、涙が止まらなかった。

そのような支援体制は、阪神淡路大震災以後、どの組織でも非常に進んできた。

今回のテーマは、「大震災の時代に生きる」である。

「天災は忘れたころにやってくる」という有名な言葉があり、忘れたころにぽつりぽつり起こるといったイメージを抱くかもしれないが、この言葉はそういう意味で受け取ると不正確である。

大災害は、平等主義ではない。とても偏向が強い。起こり始めると立て続けに起こる。これは、大地のメカニズムであり、溜まっていたエネルギーを至る所で排出し、ほぼ出さないと半世紀くらい静かなまま、平穏期と活性期のサイクルが非常に激しい。

現在我々は、残念ながらその活性期の中で

もひどい時代に生まれ合わせていると考えなければいけないのではないか。

日本列島の地震活性期を振り返ると、最近、専門家の間でよく知られており、新聞などにも表れるようになったのが、869年に起こった「貞観地震」である。

ちょうどこのたびの東日本大震災と同じで、太平洋プレートが日本列島の下にぐっと入り込む。毎年10センチ近く下にのめり込む。

スルスルと全部滑らかに入り込めば大地震を起こさず済むのだが、ゴツゴツした岩などが出ていて、引っ掛かりながら沈み込み、海のプレートに引きずられて奥へ入っていく大陸側の部分がある。弓がキリキリと引き絞られたようになり、ついに耐えられずバーンとはじける。すると今回のようにものすごい勢いで、マグニチュード9、南北500キロにわたる大地震が起こる。始まるのは震源だが、震源域というのは東西200キロ、南北500キロ。あちこちがそれに連動して、刺激を受け、大規模なはね上げが起きてしまうのだ。

動き始めた後、さらに津波が大きくなったのは、この大陸プレートの上に堆積物があったからだ。土砂が溜まっていたのだ。

この地震によりガンと揺れた衝撃で、ドドドッと1万メートルの日本海溝に土砂が崩れ落ちた。このたびの広島土砂災害のようなものである。それを併発したのだ。その結果、海が大きく動き、津波がさらに大規模になったのだという。

「明治三陸津波」というものが日清戦争の翌年に起こった。それは、このたびほどすごい津波ではなかったが、犠牲者は2万2千人に上った。今回は2万人。津波はそれほどではなかったが、犠牲者は多かった。

なぜかと言うと、地震が弱かったため人々が逃げなかったのだ。なぜ弱かったのかと言うと、沖合200キロ、深さ1万メートルで接触する付近で地震が起こったからである。

弓を引き絞るようにぐっと耐えた上で、バーンとはじけたのではなく、割と早い段階で地震が起こり、地震の揺れ方も5分にわたって長く、気付かない人もいるくらいの緩いものだった。しかし、場所が場所だけに堆積物が

大量にどっと崩れ落ちた。これは地震の大きさにはあまり影響しないが、海の中をかき乱すため、津波は大きかったのだ。

夜9時頃で、地震も大した規模ではなかったため、人々はほとんど避難せず、結果として町全体が被災してしまった。田老町などは特にひどく、翌朝行ってみると、町には誰一人いなかったという。砂原になっていたのだ。砂原から足が2本出ていたり、首が半分出ていたり、腕が片方だけ出ていたり、「何だ、人の砂漬けではないか」といった状態で、野犬がそれを食いちぎろうとするため、哀れに思った人が追い払うと逆に野犬に取り囲まれてしまうといった状況だった。救援する人も誰もいない。当時、まだ鉄道はなく、盛岡という東北道の中心部分から三陸海岸へ車の通る道すらなかったのだ。

板垣退助氏は内務大臣として現地を視察したとき、盛岡から宮古まで、3日かけて人力車で峠道を越えていった。

東日本大震災では、貞観地震の規模の大きいものと、明治三陸津波的な土砂崩れが合わさったため、大変な大津波になったのである。

そういうわけで貞観はこのたびのモデルのように想起されることとなったのだが、我々にとって恐ろしいのは、貞観の地震・津波、このときよりやや小規模なものが起こった後、日本列島に何が起こったのかである。

当時、京都で直下型断層地震が起こっている。そして、富士山が噴火している。当然だ。毎年10センチ押し上げている日本列島のプレートがどっと引いたため、結果として断層のずれが緩和されるケースと大きくなるケースがあるのだ。

それが日本列島の至る所で起こったため、各地で地震が起こり、かつ火山噴火も起こったのである。御嶽山と伊豆諸島の西の島で済めばよいのだが、あちこちで直下型地震が起こり得る。

そして、貞観地震があちらこちらで地震や火山噴火を起こした18年後に南海トラフ大地震・津波が起こり、ようやく活性期が終わった。そういうシナリオを我々はこれから経験しなければならぬのではないかとというのが、

専門家としても非常に憂慮しているところである。

「天災は忘れたところにやってくる」かもしれないが、必ず想定を外して、別の角度から奇襲攻撃でやって来る。そのため、起こったことを後追的に見ていると、全然違った奇襲攻撃を受ける。

我々が最近あまり想定していないのは、内陸部の巨大地震である。

戦国時代の1586年、天正13年に飛騨を中心に大地震が起こった。歴史の好きな人は記憶しているかもしれないが、長浜城が崩壊して、山内一豊の6歳の子どもが、それに埋もれて亡くなった。さらに、富山県の高岡城も木曾川下流の河口にある長島城も、日本海側、太平洋側、伊勢湾付近でも城が倒壊した。

城は相当頑丈に造られているため、大変なことである。驚いたことに飛騨の震源に近い辺りに帰雲城という城があったが、地震の後、帰雲出身者が郷里はどうなったかと峠を越えて見下ろした途端に「げえっ」となったそうだ。町がなくなっていたのだ。城も、町も全部土砂崩れで埋まってしまい、何もなくなっていたのだ。そういうすさまじい内陸地震だった。

歴史上知られているのは濃尾地震、マグニチュード8.0が最大だったと言われているが、この天正13年の大内陸地震は、このすさまじさから見て、8.4とか、8.5くらいではないかと想像される。それほどすさまじい内陸部断層地震であったため、おそらく一つの断層ではなく、複数が連動したのではないと思われる。

最近そういうことがあまりないため、すっかり起こりうるということを忘れているが、起こらないわけではない。

幕末安政の三大地震と言われるものがある。

2～3年のうちに連発した地震である。1854年11月4日に、東海地震が起こった。マグニチュード8.4。下田にたまたま来ていたロシアのプチャーチンの船が、これでダメージを受け、使えなくなってしまった。そして、その翌日、11月5日に南海地震が起こった。

これもマグニチュード8.4であったため、

東海から紀伊半島方面、あるいは四国方面に大きな被害を与えた。

1日違いで起こったので助かった。これももし南海トラフ全部が一度に動いていたら、マグニチュード9クラスになり大惨事になったに違いない。

その翌年の1855年に江戸直下型地震が起こった。これは関東大震災のように相模トラフが動いたのではなく、直下型の断層による地震であった。

東京湾の北端、荒川河口辺りの地下にある断層が動き、江戸の中心地域に大きな被害をもたらした。マグニチュードは6.9。神戸地震より小さいが、藤田東湖が圧死するなど、相当な犠牲を出した。首都直下と南海トラフの連動というシナリオの前例になるようなもので、今まさに恐れられていることである。

それから、無視できないことは、その翌年に東京湾、江戸方面に大型台風が襲ってきたことだ。現在、地球温暖化によって、水温が2度ほど上がっている。そうすると、雨の降る量が全く違い、亜熱帯性になってくる。そういう問題を我々は抱えているのだが、安政のときにはご丁寧に3つの震災に加えて、大型台風まで江戸を襲った。

こういう自然災害が相次いで起こったことが、幕府がもたなくなった一因ではないかと指摘する専門家もいるほどの猛威ぶりだった。

近代になり、1923年大正時代に関東大震災が起こった。第2次大戦が終わる前年の1944年と翌年の1946年、2年の差をもって南海と東南海の地震津波が起こっている。それぞれ約2,000人の犠牲を出した。しかし、社会的注目はほとんどなかった。

戦争中の管理下にあったため、報道を許されなかったのだという説もあるが、第2次大戦中の日本人犠牲者が310万人にのぼったためでもあった。

戦場で亡くなった人、空襲で亡くなった人など至る所で死が日常的だった。なんとか戦争を生き延びたと思ったら、栄養失調や結核でバタバタと倒れ、父親も亡くなり、インフルエンザが流行ると、子どもがあっという間に死んでしまうなど、もう死が当たり前のよ

うな状況だった。

310万人に比べれば、自然災害で2,000人が亡くなったといっても、ローカルニュースでしかないのだ。

昭和8年に三陸地方を津波が襲った。田老町は、再び10メートルの津波で、町も家も人も全部なくなった。その後、いくら何でもこれは悲惨ではないかということで、今村東大教授などが地震学会をつくり、活動した結果、内務省が動き、国の補助を得、3,000軒が高台移転した。しかし、これは一部にとどまった。そういうことがあり今日を迎えている。

大地震というのは、なぜか政治が荒れているときや政治力が弱いときを突く傾向がある。

関東大震災は、たまたま首相がいない状態で、加藤友三郎首相が大腸がんで亡くなり、次の首相を誰にしようかと空白をつくっているときに起こった。

阪神淡路大震災は、長い自民党政治が終わり、細川氏の非自民8派による連合政権がつぶれ、自民党が何とか政権を取り戻そうと、社会党の村山富市氏を担いでつくった政権のときに起こっている。このたびの東日本大震災は、統治経験の乏しい民主党の菅首相のときに起こったため、政府対応力が弱いときを狙ってくるのではないかと考えたくなるほど、その傾向がある。

しかし、平穏期と活性期のサイクルで見ると、1946年に南海トラフ地震が起こった。この1946年というのは戦後の平和憲法ができた年である。それ以後、日本は、明治の日本が富国強兵であったのに対して、強兵抜きの平和的富国を目指し、平和的発展主義で戦後の経済国家としての日本を再建する、その出発点が1946年の平和憲法だ。これをつくった頃から、どういうものか、地震もそれに協賛してくれたのか、あまり起こらなくなった。

いずれ核戦争が始まるか分からないとみんな心配していたが、落ち着いて考えれば、米ソどちらも持てる大国であって、持てるものを失いたくはない。従って、両方が全てを失うような戦争はしたくないので、意外に長い平和の時代であったという再評価が行われて

いる。この冷戦期にも大地震は起こらなかった。

それが1989年、ベルリンの壁が崩れ、冷戦が終わると、1995年に神戸で阪神淡路大震災が起こった。そのとき、私は神戸大学の教授で西宮市に住んでいたが、信じられなかった。直下型地震のすさまじさを体験できた人は、そう多くはない。

日赤の皆さんは、地震にずいぶん関与されているが、起こってから駆け付けることが多く、現地で体験することは限られているのではないかと思う。神戸の直下型地震は、ドカーンといきなり下から家を上空にはね上げるようなパワーが襲った。直下10キロ至近距離の地震の力というものはすさまじいものだ。

事故を分析するとき、電車の車輪が線路にどういう切り傷をつくったのか、それが重要な根拠だ。このたびの阪神淡路大震災では、阪急電車はほとんど脱線してしまい全く切り傷がなかったと言う。あの鉄の塊の車両が、上空にボーンとはね上げられ、落ちてくるときに横揺れが入り、横に落ちてしまっているのだ。これが直下型地震のすさまじさである。

私は、家族4人で西宮の家にいたが、いったい何が起こったのか、飛行機が墜落でもしたのか、山津波が来たのかと思うと、次の瞬間、ものすごい揺れが始まった。

地震ならば机の下に隠れなければ、物が落ちてくると思い、恭順の意を表すと、甘く見るなよといって引いていくというのがエチケットだ。

ところが、直下型は家も家族も引き裂いてしまう。大地の魔神が、家をわしづかみにし、絶対にやめないぞといった感じだ。殺意を感じるようなすさまじさだった。

夜が明けて、娘が窓を開けると、何と我が家の前にあった豪邸が、消えてなくなっていた。なぜ豪邸が倒壊してなくなり、庶民の家である私の家が生き残っているのか。

後で分かったのは、私の家はツーバイフォーの家だったのだ。当時、7年程前に建てた家だったが、プレハブツーバイフォーは、阪神淡路の被災地でも1軒も壊れていないのだ。

壁を組み合わせて建てられているレゴのようなもので、転がしても壊れないところが特徴だ。それに対して、伝統日本家屋の豪邸は支柱がありそれが電車も上空に上げるようなパワーで、ボーンとはね上げられ、落ちてくるときには二枚げり、足を両方払われたようになり、横へガタンと落ちるのだ。そこが直下型地震のすさまじさである。

逆にこのたびの東日本大震災時、宮城県栗原市は震度7と阪神淡路の被災地と同様、最高の揺れだったが、犠牲者はゼロだった。

なぜかと言うと、直下型のドカーンというはね上げはなく、大きくゆっさゆっさの大揺れだ。意外に家屋倒壊はなく、圧死もほとんどない。

どういう性格の、どういう距離関係の地震かというのは非常に大事である。生と死の際どい差に放り込まれた被災者が、どれほど大きな衝撃を受け、そして、生きていくかということの不思議さ。生と死の針先ほどの偶然で生きる人と死ぬ人に分かれる。

39名の神戸大学生が亡くなった。幸い私の家屋は、ツーバイフォーのため無事だったが、地下が液状化したようになり、25センチ家が移動し傾いて止まった。ピンポン球が廊下を走るようになり、定義上全壊ということになった。

家内と娘2人は、広島で親しくしていた友人宅に疎開した。そのご子息が、庄原日赤の院長、中島浩一郎さんである。中島さんのお母さんが、娘たちを含む家族を大変大事にしてくれた。私は1カ月後に伺ったが、こんなによくしていただいたのかと感動した。

中島氏は不在だった。理由は、日赤の医者として車に薬をいっぱい積み、神戸へ走ってくれていたからである。彼から聞いた話だが、道路が渋滞のため救援車も動かない中、何とか被災地へ辿り着こう、医薬品が不足しているだろうと日赤の車両が突っ込もうとするが、どうしようもない。渋滞している間に入り込んで頑張っても地面が地震でボコボコになっており、隣の車にガツンとぶつけてしまったそうだ。

アメリカ人なら全然平気で、路上駐車で場所が足りないと、前の車にぶつけ、ちょっと押し、バックして後ろの車にぶつけて、場所を空けて入るという。横で見ていて何をするのかという顔をすると、“ジャスト”キスなどと言う。そういうアメリカ人と違い、日本人は車を傷つけることをとても怖がる。

中島氏も、車をぶつけた後、これはえらいことになったと謝罪したところ、「いやいや、日赤でしょう。早く行ってください。被災したときはお互いさまです。」と言われたそうだ。

災害ユートピアという言葉があるが、普段はうるさく厳しい人々でも、災害時は皆で助け合わなければならないという思いが非常に強くなる。そういう国民の温かい支援を神戸の被災者の1人として、非常に強く感じた。

もう一つ、阪神淡路の経験で私が逆に困ったなと思ったことは、行政の厳しさだった。

経済特区は認めない、一口二制度は許されない、法体系の整合性を外してはならない。「阪神淡路は大変な被災だが、国の支援は復旧までに限る」というのだ。

「震災前よりもよいものをつくろうとするのであれば、国の経費は使ってはならない。地元のお金でやりなさい」という指示を受けたのだ。

これは、後藤田ドクトリンと言われるが、警察出身の有力政治家である後藤田正晴氏の考えだ。彼の考えは、神戸の地は全国の中でも比較的豊かな地であり、そこが被災したからと言って止めどなく復興費をつぎ込むと、神戸は益々豊かになり、他の地域との格差がひどくなる。これは、国内的公平性に劣るため、国の経費は復旧までとし、よりよいものは自分でやりなさいという枠付けをしたのだ。

現地にいる者にとってこれは非常にはつらいものだった。例えば神戸港は、80年代、コンテナ輸送で世界の海運をリードしていたが、大型コンテナ船が出てくると、釜山や高雄には深さ15メートルの大型コンテナ船が入るようになり、12メートルの神戸港は、国際競争に負け始めた。そのとき神戸地震が起こり、

再建するにあたって、国際競争に参戦できるようにと、深さ12メートルではなく、15メートルの大型コンテナ船が入るものに変えたいと要望したところ、「駄目だ。それなら地元のお金でやりなさい。」と後藤田ドクトリンが立ちはだかったのだ。

地元にお金があるわけがない。結局、大急ぎで元の深さ12メートルの港に戻し、神戸港は引き続き衰退した。それは日本の国際競争の敗退でもあったのだ。

また、個人は救済の対象にならない。個人の家は私有財産であって、国の経費は私有財産につきこんではならない。法体系の整合性からいって、自分の家は自分で建て直しなさいと突き放したのだ。現地ではとんでもないことである。個人はおろか小さな自治体の能力をも超える大災害なのである。こういう困っているときに国が助けず、いったい何のための国なのだという不満を持ち、一生懸命運動した。その運動が実り、3年後に被災者生活再建支援法という法律ができ、その結果、災害で個人の家が被災した場合には国から補助ができるようになった。

私自身は現地の方々とともに、このような災害が二度と起こってはならない、起こった場合には、よりよい対応ができるよう頑張らなければならないという思いを持ち、新たにできたシンクタンクのオーラルヒストリー、つまり震災の記録を世界に永遠に残す、市長、県知事をはじめ、警察、消防、自衛隊などあらゆる関係者にインタビューをして、あのときどうだったのか、何が教訓かということを残すプロジェクトの委員長も引き受けた。

国は、積極的復興は許さないとしたが、現地ではそれを何とかはね返し、今、私は「ひょうご震災記念21世紀研究機構」というところで仕事をしている。

地震研究の科学的な研究を元にしながら、社会を守る、社会を支えるためにはどうしたらよいかを考える「人と防災未来センター」という研究所、あるいは、「こころのケアセンター」で、どちらも日本に唯一の機関である。

東日本大震災が起こり、1ヶ月近く経とう

とするとき、当時の菅首相から夜突然、私の携帯に電話がかかってきた。なぜ総理が私の携帯番号を知っているのかと不思議に思ったが、「復興構想会議をこれから立ち上げるので、議長をやってくれ」という依頼内容に驚いた。

三人の副校長に意見を聞くと、「できる限りカバーしますから、引き受けてください。日本がよみがえるいい機会だと思います」と言われた。皆、このような悲惨な状況の中で、日本の再生を思う熱い気持ちを持っていたのだ。これは逃げることはできないと思い、結局引き受けることにした。

私は議長として、第1回の会合の前に5つの基本方針のようなものをつくった。

基本は2つ。1つは「被災地を見捨てない」ということ。

阪神淡路大震災のときに全国から温かい支援をいただいた。それがあってこそ、よみがえることができたのだ。「今度は、我々が東北の人たちを見捨てません。全国民で支えます」と、不可能までとは言いませんが、できる限りのことは行うというのが一つだ。

もう1つは、阪神淡路大震災のときに中央行政がうるさく規制したように、復旧に対するお金しか出ないのであれば東北の人は死んでしまう。経済的に比較的強い神戸でさえもいまだに5,000億円の負債が残っており、それが財政を圧迫し続けているのだ。

東北の人に「よりよいものをつくりたいのであれば、自分でやりなさい」と借金の山を与えてしまえば死んでしまう。積極的復興を国と国民で支えなければならない。

例えば、福島原発は事故を併発したが、再生可能エネルギーというものが、これからの町には必要である。それを内蔵した新しい町をつくれればよいのだ。それを国は支えるべきだという復興構想にした。

それから、被災した地域は全国的に見ても高齢化が進んでいる。そういう場合、安全のために高台へ移転をなさいと言い、高台移転をしてそこで仕事もなく、立ち枯れしてしまうというのではいけない。

高齢者に対する包括ケアができる町、ある

意味で東北が新しいモデルになるようにすべきである。日本全国も再生可能エネルギーを必要とし、かつ高齢化していく。そのような中で、全国のモデルになるような復興を行うべきだと考えた。

そして、明治、昭和の三陸津波で、あんなにも悲惨に次々に殺され、また今度も2万人を失い、将来また同じところに家を再建しても、また繰り返してしまうことになる。それを防ぐためにも高台移転を国の経費で行うべきである。

国土交通省には、4分の3は国の経費、4分の1は地元負担という支援のスキームがあった。しかし、もっと高い比率で国が支えるべきである。今は交通が発達しているため、高台であってもいい道をつくれれば、10分で海辺に出られるところが多い。

しかし、釜石の方々は「やはり町自体が海辺で成り立っています。高台など行けません。我々は、地形的にそんな丘の上の造成地はあり得ませんし、港があってこそこの町です。」その場合には多重防御、減災手段を組み合わせます。防潮堤を今までよりしっかりしたものにして、そして、町のあるところまで入ったら二線堤、鉄道とか、あるいは主要道路を土手にして、その上を走らせます。そうすると、防潮堤を越えて、公園を越えてきたものもそこで最終的に止まるという二線堤のある町にし、一般民家はそれより陸側でつくるようにします。それより海側でつくってもいいですが、強い鉄筋コンクリートの5階建て以上の建物にして、そこをオフィスとか、水産加工事務所にしたらよいのです。

そういうプランを作り、積極的な復興に減災手段を組み合わせるということを非常に重視した。阪神淡路のときの復興費は10兆円でしたが、今回は10兆円ではとても足りないと考えられた。

私個人の考えとして、義援金、それから、やはり借金、国債、地方債、公債も使おうと思った。しかし、それに頼りすぎはいけない。なぜなら日本は、GDP 200%。あの破綻したギリシアもGDP 140%の国家財政赤字だからだ。

日本はそれを超える200%の国家財政赤字を積み上げている。とてもお金がかかるからといって、また借金でやればどうなるか。日本経済が国際的に信用を失って、取り付け騒ぎが起こったら、ものすごく悲惨だ。

ギリシアはEUで抱き留めることができた。しかし、世界第3位の経済大国である日本が経済的に倒れたら、誰も支えられない。逆に世界が引きずられるだろう。そのため、日本自身がしっかりしなければならない。

必要な国家予算の半分しか税金が取れないというのは恥ずべきことである。

会費を半分でいいよといって、誰が出してくれるのか。それは、来年以降につけまわしておきなさいということになる。少子化で数が減っていく子ども、孫につけまわしているというのが、予算の半分は借金で、特例公債で賄っているという事態なのだ。それをやめなければならない。

増税は誰も望まないが、しっかりと国民皆で負担しなければ、必ず経済的に破綻するため、私は最初から復興税も視野に入れることを方針とした。

すると、第1回の復興構想会議後の記者会見で、そこを突かれ、「今日はそういう復興税の話は何も会議ではしておりません。個人的見解でいいですから」と言われたため、そう言うと、翌日の新聞に「復興構想会議議長、増税を提案」と大きく掲載され、大変非難を浴びた。

世論調査の結果を見ると、国民の6割は復興のためなら増税はやむなしと理解している。

東南アジアへ行ったときに、タイの有識者と話をすると「五百旗頭先生、みんな義援金は出すのです。これは喜んで出します。しかし、強制を伴った増税という話になりますと、国民はどこでもたちまち機嫌が悪くなって、それを無理押しすると反乱が起こります。それが世界の常識です。日本人は変わっているのですね」と言われた。

いよいよ年末になり、与野党3党の合意で25年間の所得税増税、さらに公務員は給与を返上し、暴動、反乱が起こるかというところではない。それは、日本国民が互いにいつ被

災者となるか、どこが被災地となるかわからないと思っているためだ。

しかし、日本に安全な地などない。どこだって起こりうる。起こったときに何とか生き延び、そして、全国民が被災地を支えてくれるという安心感がなければ、この災害の多い日本列島では生きていけないだろう。そのことがこのたびの東日本大震災の復興時にはっきりしてきたと思う。「日本人は素晴らしい」という国際的称賛を浴びた。

何が素晴らしいのか。それは被災地の人の振る舞いである。

阪神淡路大震災のときもそうだったが、他国ではどこもパニックが起り、暴動、略奪が横行する。コンビニから物を奪い合うといったことが全くなかったわけではないが、圧倒的多数の日本人は、静かに被災者同士で助け合っている。もらったおにぎりを分け合っている様子を見て、世界の人が驚き、日本人はどうしてこんなに立派に振る舞えるのかと称賛された。

また、私がイギリスで講演したとき、イギリスの識者が褒めてくれたのは、東北3県を270キロで疾走していた新幹線の上下10本が、全て安全に止まったことだった。緊急地震速報という新しい日本の技術が生きているということを知っていた。

道路、空港、サプライチェーンの復旧の早さも大変なものである。

そして、地震そのもので圧死した人が栗原市だけではなく、ほとんどいないというのも世界的な驚きだった。しかしながら、津波では2万人もの人が犠牲になってしまった。

私はフィリピンのマニラにあるアジア開発銀行で、東日本大震災の教訓を話すよう依頼され、日本ほどのものがどうして2万人もの犠牲を出したのかとお叱りを受けると思っていたところ、話が終わった後の質問は逆で、「なぜ2万人で済んだのか。同じマグニチュード9の大地震津波だったスマトラでは、インドネシアだけで20万人が死んだのですよ。全体としては30万人死にました」と言われたのだ。

東日本大震災の津波では、結構な大都市が

都市ごと流され、家も、人も、車も全て被害を受けた。それを見て、スマトラが20万人なら、東日本は50万、100万人ではないかという想定をしていたのが、2万人と聞き、逆に驚かれたのだ。

どうしてそんなに少なく済んだのか。学校の教育では、揺れが来たら子どもたちは身一つでより高い所へ逃げなさいという教育がしっかり行われていた。大川小学校の悲劇もあり、併せて270人程の小中高校生が犠牲になった。

しかし、明治三陸津波では、当時まだあの地域には尋常小学校しかなかったが、小学校だけで5,600人が犠牲となった。今回は、小中高併せて270人。それはいかに逃げるというソフトが大事かという教育が行われていた証拠である。

それが大きく支えたということは、世界銀行の報告書でも指摘されている。

高知平野へ行ったときはショックだった。2～3メートルの防潮堤しかなく、ずっと平坦な平野で、高台まで行くには遠すぎる。そして、集落は1階建て、2階建てばかりで、鉄筋コンクリートの4階建て、5階建てのものもない。ここは津波に襲われたら、逃げ切れることはできないと思った。

東日本大震災後、国土強靱化という構想があり、高知市の平野部では100以上の避難タワーを建造中である。真ん中が階段で、周りにはスロープがついており、車いすの人を押してあがれるようになっている。

このたびの東日本大震災で犠牲になった人は、どういう人たちか。

逃げなかった人、逃げ遅れた人に加え、人を助けようと思った人が多い。

消防団員254名。市民を心配して、自分は水門を締め、そのまま逃げればよいところを、町に戻ってきたらまだ逃げていない人がいたため、逃げなければ駄目ですよと呼びかけている間に、自分が津波に捕まるというケースが非常に多かった。

南三陸町の24歳 遠藤未希さん。「間もなく6メートルの津波が来ます。すぐに逃げてください」とマイクで言い続け、自ら犠牲になった。女川町の佐藤充さん。「中国人の研



修生は、津波の怖さを知らないでしょう」と、20名の中国人研修生を集め、高台まで連れていき安全な所に送り届け、自分はもっと人を助けようとして亡くなった。

車いすの方の世話をしていた家族および施設職員の方。

津波が間もなく来る、もう見えてきたというときに、これをやっていたら両方とも死にますから、私だけ逃げて助かりますという振る舞いをする人が本当にいなかったのだ。皆一緒に亡くなった。

日本人の思いやり。日頃はそれほどなくても、災害時には格別に熱いものがある。

そういう中で国民が大きな寄り辺になるのは、全国民が生き延びてさえいれば、何とか

支えてくれるという安心感。

もう1つは、日赤のような専門機関が全力を挙げてそのときに備え、支えてくれるということだ。単に思いだけではなく、技術を持ってである。

警察、消防、自衛隊だけではなく、こういう日赤のような防災医療を自分たちの任務とし、誇りにする方々がしっかりとやっている。そういうものがあってこそ、この列島のどこにいても安全ではないが、何とか生き延びることができるのだ。

皆さんの活動に敬意を表するとともに、そのことを申し上げて、私の話を終わらせていただく。